

2023年 12月  
第4回ポストドク報告書  
久門 智祐

2021年の夏にUniversity of Pennsylvaniaで生物学のPhDを取得し、2021年の冬からMITのWhitehead Institute, Howard Hughes Medical Instituteでポストドクとして勤務する久門智祐です。ポストドク2年目の夏からポストドク2年目の冬に至るまでの経過を報告します。

報告書を書くにあたって思うところがあり、PhD時代に書いていた報告書を見返していました。すると2019年12月の報告書には「いまのところ報告書で宣言しておく与实际そのようになっているので、ゲンを担いで次の報告書までには論文と総説と次のポストに目処が付いているようになっていればいいなと考えています」などと書いており、その次の2020年6月の報告書では「非常に見事な前フリです。卒業後は芸人を目指してもいいかもしれません」などと書いており、現実の厳しさを学んだようです。さて、前回の報告書では「次のポストドク報告書を書く時期は、プレプリントをbioRxivに投稿し、K99に応募し、アカデミア就活の最中（のはず）です」などと書いており、やはり人は学ばないのだなと思いました。そう、自分が筆頭著者の論文のプレプリント（査読前の論文）が今頃には完成しているつもりでした。しかし現実はその甘くなく、「あの実験が足りていなかった」や「この結果が出たから、あの実験も足さなければ」といったように、なかなか完成に届きません。悪い意味での遅れではないので良いのですが、やはり論文を書くのは時間がかかるなと改めて実感しています。

K99はアカデミア就職を目指す人向けのNIHのTraining Grantで、1~2年のポストドク期間と独立した後3年の資金を提供してくれるプログラムです。つまり、本来はアカデミア就活を始める前に応募すべきプログラムです。家族の事情もあり今年から就活を始めたため、ギリギリ応募ができる10月締め切りのプログラムに応募しました。が、この判断はかなり後悔しました。というのもアカデミア就活の応募も10月締め切りのものが多く、加えてなんとかプレプリントを応募までに完成できないものかと実験も多く詰め込んでいたため、K99の書類作成、就活の書類作成、論文の実験の三つに追われることになったからです。K99はNIHという公的機関への応募のため、作成する書類も多く、その手の書類作成が苦手な身としてはかなり苦しいものでした。さらにK99の書類は今後数年の目的や実験プランといった短期的なものが求められているのに対し、アカデミア就活の書類は今後10年単位の長期的なものを求められているため、同時並行で進めると混乱することもありました。締め切りが近づくと目をつむって諦め、ポチッと応募ボタンを押しました。

他には、自分がほんの少しだけ手伝った論文が出版されたり、投稿されたりしました。

Nelson, J.O., **Kumon, T.**, and Yamashita, Y.M. (2023). rDNA magnification is a unique feature of germline stem cells. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 120. 10.1073/pnas.2314440120.

Thomas, G.W.C., Hughes, J.J., **Kumon, T.**, Berv, J.S., Nordgren, C.E., Lampson, M.A., Levine, M.T., Searle, J.B., and Good, J.M. (2023). The genomic landscape, causes, and consequences of extensive phylogenomic discordance in Old World mice and rats. *bioRxiv* 10.1101/2023.08.28.555178.

## おわりに

公私ともに忙しいですが、体と心の体調を崩さないよう気をつけながら、効率よく進めたいと思います。大学院以降もさまざまな形で支援をしていただける船井財団にこの場をかりてお礼を申し上げます。